リーディングの理解における英文法の困難点について — *Power-Up English* 〈*Pre-Intermediate*〉 を実例にして—

Grammatical Difficulties in Reading Comprehension :
Referring to *Power-Up English* 〈*Pre-Intermediate*〉

神 野 雅 代

Masayo KANNO

〈要旨〉

リーディングで、学生が英文の内容理解に支障をきたしている原因の一つに文法知識の適用が十分に機能していないことを鑑み、学生がつまづいている文法項目について検証した。つまり、「リーディング」の授業において、授業実施後、学生に本文を復習させ、内容理解に依然として疑問が残る英文を列挙させ、あわせてその根拠を書かせた。それを例文と照らし合わせて文法的に分析し、複合的に絡み合う文法項目の中でどの用法に困難を感じているのかを明らかにした。その用法の扱い方になぜ錯誤が生じるのかを把握することで、今後のリーディング指導の向上に役立てたい。

キーワード：リーディング、精読、英文法への関心、指導法

1. はじめに

近年、英語のコミュニケーション能力が重視されるようになり、Communicative Approachなどの教授法の導入によって今の大学生はコミュニケーションの手段としての英語を習得する授業を受けてきた。しかし、江利川(2011)によると、「コミュニケーションを通して文法の内在化まで到達させることをも目的としているにもかかわらず、学校現場では授業時間数の不足などのためにそこまで行きついていないのが現状である。そして、最近の中学・高校・大学生の英語力は文法を中心に教えていた頃と比べてかなり下がっている」と述べている。

成田(2013:154-55)によると、「(言語の基盤を構成する)学習内容(文法、語彙、発音ほか)は、教師が選んで明解に教える必要がある。自ら学習の指針と方略を自身で見つけるようなことは、せめて中級レベルまで習熟してこない、なかなかできるものではないからである。そして、教師は、明示的で分かりやすい文法指導をすることによって、つまづいている言語形式を理解できるようにしなければならない」と述べている。

そこで、本稿ではリーディングにおいて学生がどの文法項目でどのようにつまづいているのかを分析した。¹⁾ 英文は *Power-Up English* 〈*Pre-Intermediate*〉 の Unit 11 ~ 20における Reading Section の Reading Passage を使用した。その単語数は256 ~ 291語であった。

2. Reading Sectionの指導法

門田ほか(2010:37)によると、リーディングでは「事実の把握や文内外での言語的な構造を把握し、文章に直接書かれた情報の意味を正確に理解」させることが重要である。

Power-Up English (Pre-Intermediate) のReading Section は、Reading Passage、Words & Phrases (本文の語彙確認問題)、Exercise、Read Aloud (音読練習)、Information for the Topicで構成されている。

Exercise 1 は、英文の空所補充形式の問題である。主題を問う設問と、主題を読み取る際に役立つ文中の語句の意味を問う設問が1問ずつ含まれている。Exercise 2 は、本文の内容について書かれた英文についての真偽を問う問題である。言い換え表現や代名詞を正確にとらえ、何を指しているかをおさえながら読む習慣をつけることができると思われる。また、複雑な言語構造のために誤解される部分の理解を尋ねる設問でもある。全ての設問に答えれば本文の要旨をおさえられるので、学生が自分の力で英文を深く読む力を育成できると思われる。Read Aloud は、強勢が置かれる単語やポーズの位置に注意して音読練習をするコーナーである。ここでは、文法がポーズやプロソディなどの音韻にある程度反映されていることを意識させることができる。Information for the Topic には、Reading Passage で取り上げたトピックに関して興味を喚起させるような情報が紹介されている。

本テキストは、全ユニットを通してリスニング、リーディング、文法のセクションで構成されており、この3つのセクションは1つのトピックで関連付けられている。そのため、Information for the Topic とあわせて興味や知識を深めてさらに自ら読もうとする姿勢を持たせることができると思われる。

予習ではテキストの Words & Phrases を完成し本文の注釈を理解してから、文字を見ずに本文をテキスト付属のCDで繰り返し聞かせた。授業では、本文を音読させて、区切り方が正常でないなどの問題のある箇所には重点的に文法的解説をも加えた。文法がある程度発音に反映されているとすれば、発音の間違いはそこでの文法を正しく理解していないことになるからである。授業実施後に本文を復習させ、疑問が残る文を全て挙げてその理由や根拠を書かせた。

3. Reading Passageにおける難解文と学生のコメント

本章では、実際に学生が列挙した難解文となぜ難しいと感じたのかを書いたコメントを挙げる。コメントの文章が不完全な場合は、その内容に応じて文章を適宜、修正している。文法用語や内容に不備があるコメントについては、受講者の様子とコメントから情報を読み取り、筆者の判断で文法項目に照らし合わせて種類別に例文を提示した。なお、複数の学生が同様のコメントを書いている場合も、コメントは1つにまとめた。

① 「感嘆文」の関わる文について

- (1) ...what a humiliation for me when someone standing next to me heard a flute in the distance and I heard nothing, or someone standing next to me heard a shepherd singing and again I heard nothing. (p.62)

「whatから始まる文をどのように訳せばよいかかわからなかった。」

② 「命令文」の関わる文について

(2) Take a ride in a hot-air balloon and you will be enchanted with the extraordinary beauty of the scenery. (p.78)

「主語と動詞がどれなのかがわからなかった。」

(3) So let's all be smart shoppers and enjoy shopping! (p.54)

「So let's all beをどのように訳せばよいかかわからなかった。」

③ 「受動態」の関わる文について

(4) You and your co-worker, Ms. Tonomura, have been assigned a special mission to go to the company-owned oil rig, check it out, and report back on how much damage it has sustained. (p.74)

「一文が長く、コンマで区切られているところが多くわかりにくかった。目的語などの区切りがわかりにくかった。」

(5) He was being kept alive on a life-support ventilator. (p.86)

「keptがないと、意味は変わるのだろうか」と疑問に思った。」

④ 「接続詞」の関わる文について

(6) But for the time being, the key is to work hard and earn the seed money or capital you need to plant and harvest your "crop." (p.50)

「訳は理解できたが、andの後にさらにorも出てくるので少しややこしかった。」

(7) So I recommend making lists—lists of the clothes already in your wardrobe, of your must-buys, and of the things you would like to buy. (p.54)

「文を構成する単語がどのようにつながっているのかがわかりにくかった。文法的にわかりにくかった。andのすぐ後ろにofが続いているので意味が取りにくかった。」

(8) Eventually, Beethoven became totally deaf, and was no longer able to hear his own works performed : he could hear his music only in his mind. (p.62)

「連結文であるので難しかった。一文が長く訳し方が難しかった。」

(9) The writer thinks that Japan, with its relatively low crime rate, is one of the world's safest countries. (p.66)

「thatが用いられているのでややこしかった。」

⑤ 「前置詞」の関わる文について

- (10) For more information, please check our website. (p.58)

「For more informationをどのように訳せばいいのかがわかりにくかった。」

- (11) For more than two centuries, people all around the globe have been comforted by Beethoven's creations during times of difficulty. (p.62)

「For more than two centuriesをどのように訳すのかがわかりにくかった。」

- (12) I think of myself as a reliable, cooperative person with excellent communication skills. (p.58)

「asにはいろいろな意味があるので、訳すのが難しかった。」

- (13) According to the International Basketball Federation, at least 450 million players play "hoops" around the world. (p.82)

「副詞や前置詞が多いから難しく感じた。」

- (14) And Hokkaido, with its wide-open spaces, gives a feeling of freedom that you can't get anywhere else in the country. (p.78)

「どこが主語なのかがわかりにくかった。コンマで区切られているところが2か所あり、難しく感じた。anywhereは『どこでも』という訳でよいのか知りたいと思った。」

- (15) At about 250 million players, soccer, then, is only a distant second, but still far ahead of baseball, with only 35 million participating in games worldwide. (p.82)

「文が長く区切りがわかりにくかった。」

- (16) A survey by a Japanese foundation even suggests that walking is the most popular *sport* in Japan, with over 23 million participants a year. (イタリック体は原文) (p.82)

「文が長くコンマで区切られているところがあるので意味をとりにくかった。」

- (17) But with so much clothing to choose from these days, we are in danger of buying more and more, yet less and less useful items. (p.54)

「withは使い方がいろいろあるが、この文ではどのような意味で使われているのか確認したいと思った。コンマで区切られているところが多く、yet から始まる部分もあるので訳しにくかった。」

- (18) With a little planning, you can keep your wardrobe tidy and satisfy your desire to look fashionable at the same time. (p.54)

「長い文で知らない単語がいくつか入っている文章はどのようにすれば適切に訳す

ことができるのか、また単語の意味は前後の文章から読み解くしかないのかを知りたいと思った。」

- (19) With such facilities located on company premises, mothers do not need to drop off and pick up their children at a daycare center. (p.70)

「with such は1つのまとまりのある意味として構成されているのかを確認したいと思った。」

⑥ 「動名詞」の関わる文について

- (20) This means finding good firms to invest in and keeping the stocks for a long time—like planting and harvesting a good crop. (p.50)

「ダッシュで文をつないでいるので訳し方が難しかった。」

- (21) Seeing our country through the eyes of an outsider can make us aware of things we were not aware of, which is one of the many joys and benefits of cross-cultural communication. (p.66)

「主語が長いので難しかった。文法的にわかりにくかった。」

⑦ 「分詞」の関わる文について

- (22) The items on your lists, including your basic must-buys, can be purchased at minimal prices. (p.54)

「どれが主語なのかがわかりにくかった。」

- (23) This is a problem common to most developed nations, where more and more women are entering the workforce and having a hard time balancing continuing their career and their household duties, including the raising of children. (p.70)

「includingから始まる部分がどこにかかるのかがわかりにくかった。」

- (24) Considering only the number of players registered in sports associations around the country, baseball (including “rubber-ball” baseball) is Japan’s largest sport, with over 1.2 million players. (p.82)

「主語がどれなのかがわかりにくかった。」

⑧ 「to不定詞」の関わる文について

- (25) I have always believed that the best way to provide warm hospitality and ensure customer satisfaction is to treat guests the way that I myself would want to be treated. (p.58)

「I have always believed that… は、I always believe that… とどのような訳し方の違いがあるのか疑問に思った。ensureの意味がわからなかった。is + to は熟語として覚

えているが、どのような時に使うのか疑問に思った。I myselfは自分自身という意味でよいのか確認したいと思った。」

⑨ 「関係代名詞」の関わる文について

(26) Who wants to marry either a part-timer or a temporary contract worker who lives on a small income and faces the constant risk of being fired? (p.70)

「文が長く、1文に who が2つもあるのでわかりにくかった。」

(27) What you need to do is to learn how to increase your assets like Warren Buffett and George Soros, the two most successful “players” in finance. (p.50)

「what で始まっているのでわかりにくかった。」

(28) This involves chasing a prey aggressively, for which Soros is sometimes criticized. (p.50)

「関係代名詞が用いられているのでわかりにくかった。」

4. 英文理解における困難点とコメントの解釈

本章では、学生がどの文法項目でどのようにつまづいているのかを知るために、3章で文法項目別に列挙した英文に対して、学生のコメントに沿って困難点の分析を加える。安井(1996: 44-45)は、文の種類という観点から中心文型の文は単文、平叙文、肯定文、能動態の文であるとしており、①の感嘆文と②の命令文は、平叙文に対する文であり、③の受動態の文は、能動態の文に対する文であるとしている。

① 困難点の分析：「感嘆文」

(1)のコメントにおいて「whatで始まる」部分の訳ができない1つの理由には、what は本章の⑨に述べられているように関係詞節や疑問文でも使われることが挙げられる。また、本章の④の接続詞が(1)に含まれていることも考えられる。④では、等位接続詞においても十分に文構造を解析できていなかったからである。

② 困難点の分析：「命令文」

(2)は動詞で始まっているが、接続詞 andで節がつながっている。後ろの節には主語があるが、学生は「主語と動詞がどれなのかがわからなかった」と述べている。そこで、Take a ride in a hot-air balloon. に接続詞 and と you will ... が続くことによって「熱気球に乗れば、…になるでしょう」という意味になることを確認する必要があると思われる。また、このような表現は、一連の動作や行動の手順を説明する際にも使われることもあわせて指摘しておく必要があると思われる。

(3)の文頭の so も接続詞であり、本文において前の文で述べられた内容を「だから、…」のように受けてつないでいる。安井(1996: 56-57)は命令文について「相手に命令をするだけ

でなく、依頼・希望・注意・禁止など、いろいろな意味を表す」と述べている。そして、次の例文を挙げている。

〈例文〉

What fun! Let me try it, and let Tom have a try, too.

(おもしろいなあ。私にやらせてください。そしてトムにもやらせてください。)

この例文において let が扱われているので、(3)のlet'sは勧誘を表すが、本稿でもそれに従った。(3)は省略しなければ、Let us all be smart shoppers. となる。「どのように訳せばよいのかわからなかった」というコメントなので、allがusにかかっていることやbe動詞の「…になる」という用法も確認する必要があると思われる。

③ 困難点の分析：「受動態の文」

(4)は完了形の受動態、(5)は進行形の受動態である。(4)と(5)において動作主は省略されている。対応する能動態の文にtheyを主語として補って変換するとそれぞれ、(4)'と(5)'のようになるので文構造が理解しやすくなると思われる。また、(5)'においては動詞がkeepであるということがわかるので、(5)のコメントにおけるkeepの役割に関する疑問も解消されると思われる。(3)においてbe動詞の1つの用法を指摘したが、(5)ではbe動詞の助動詞としての使い方を確認する必要があると思われる。また、いつも人工呼吸器をつけているのなら、They kept him alive on a life-support ventilator. と表されるが、一時的にそれを病院でつけているので進行形になっていることも指摘しておくべきである。

(4)' They have assigned you and your co-worker, Ms. Tonomura, a special mission to go to the company-owned oil rig, check it out, and report back on how much damage it has sustained.

(5)' They were keeping him alive on a life-support ventilator.

英語ではある話題が先行する文脈から続いている場合、話題の中心になっているものを主語にして受動態の文にすることがある。そのため、(4)'と(5)'の目的語がそれぞれ(4)と(5)において主語になっている。(4)の目的語は、a special mission であるが、後位に to不定詞が形容詞的修飾語句として名詞のすぐ後に置かれている。go to the company-owned oil rig と check it out と report back on how much damage it has sustained が接続詞 and で連結されているので「一文が長く」感じられたと思われる。

④ 困難点の分析：「接続詞」

(6)の等位接続詞において、最初の and は to不定詞の work と earn をつないでおり、earnの前の to は省略されている。or はearnの目的語名詞の money と capital をつないでいる。capitalの後ろには目的格の関係代名詞が省略されている。(7)は lists が省略されているために「単

語のつながりがわかりにくかった」と思われる。以下のように接続詞とコンマを利用して文を短く区切り、lists が省略されていることを視覚的にわかるように示すと文構造がわかりやすくなる。

〈(6)の例示〉

lists of the clothes (already in your wardrobe),
of your must-buys, and
of the things (you would like to buy)

(8)も次のように接続詞とコロンの利用して文を短く区切り、省略されている単語を視覚的にわかるように示すと文構造がわかりやすくなる。

〈(8)の例示〉

Beethoven became totally deaf, and
was no longer able to hear his own works performed :
he could hear his music only in his mind.

(9)においては、with its relatively low crime rateの挿入句に惑わされて従位接続詞のthat を関係代名詞のthatと使い違いをしたものと思われる。

⑤ 困難点の分析：「前置詞」

例文を学生のコメントとともに分析すると、前置詞の多義性により文の意味理解が困難であったことと、前置詞によって文が長くなるので文構造の解析が困難であったことの2つに大きくまとめられる。(10)と(11)はfor、(12)はasとwith、(13)はaccording toとaround、(14)～(19)はwithの例である。withの使われている例文が難解であったという指摘が多数あったのでさらに分析すると、(12)のようにwithの直前に名詞がある形容詞句に関して疑問点は挙げられていなかった。しかし、副詞句には疑問点がコメントに列挙されていたので、学生にとって難しい事項として副詞句の文中での働きを重点的に説明した。withの直前に名詞のない(14)～(19)がそれに該当し、その中でも付帯事情を示す句を導いている場合は特に学生にとって意味をとるのが難しかったようである。

(13)においてaroundは前置詞だが、学生は同形で副詞として用いられることがあるの思い出した可能性がある。(14)のコメントからanywhereも定着していないと思われたので、everywhere, anywhere, nowhereの変形のパターンを以下のように練習した。

〈例文〉

- a. You can eat lunch everywhere.
- b. Is there anywhere else where we can eat lunch?

c. There was nowhere else where we can eat lunch.

そして、同様の形式の *everything, anything, nothing* も十分に使えるかどうかを確認した。

(17) の *more and more* と *less and less* は、反復によって語句を強調しており、*yet* も後ろの比較級 *less* を強めている。(17) のコメントは、学生の書いた元の表現において「*yet* から始まる節…」という文法的誤りのある記述となっていた。学生には語・句・節の定義を定着させる必要もあると思われる。

⑥ 困難点の分析：「動名詞」

(20) において、まずコメントにダッシュが挙げられている。ダッシュについて原田 (1998 : 63) は、「文の連続性を中断するが、その度合いはコンマよりも強い」と述べている。授業では「ダッシュのところでは執筆者が少し考えていることを表している。考える間を少し置いてダッシュの後でその内容を述べている」と説明し、音読の際にもダッシュの位置でポーズを置かせた。次に、ダッシュ以外の部分の文法項目を分析していく。初めに、主節の主語である *this* は本文でその直前の文を指している。動詞 *means* の目的語として動名詞 *finding* と *keeping* が接続詞 *and* でつながっている。そして、ダッシュの直後の前置詞 *like* の目的語として動名詞 *planting* と *harvesting* が接続詞 *and* でつながっている。このように様々な要素が複合的に絡み合っているので、文全体の意味をとるのが難しかったのではないかと見受けられる。

(21) においては、主語が *seeing our country through the eyes of an outsider* であることは理解していた。*our country* とは文脈から「日本」のことで、*outsider* は「外国人」のことである。*seeing* は動名詞であり、文中で名詞の働きをして主語となっている。そして、動名詞は動詞のような働きを持つので、前置詞を介在せずに *our country* という目的語をとっており、*through the eyes of an outsider* という副詞的修飾語句をもっている。

⑦ 困難点の分析：「分詞」

分詞については、同一形態の動名詞との区別において理解不足が目立ったので、次に分析を行う。(22) と (24) の「主語がどれなのか」という疑問は複数のコメントで述べられていたが、(23) の主語に関する疑問は全くなかった。それは、*this is* が文頭にあったからであると考えられる。(23) に挙げたコメントは、「*including* から始まる節」という学生による記述を書き直したものである。つまり、「節」という文法的誤りのある記述から、学生は *including* が分詞、または前置詞であるということを正しく捉えていないということがいえる。(22) において、*can be* の前の単語で主語になるものを探すならば、まず文頭の名詞 *items* が挙げられる。(21) においては、動詞の *ing* 形を主語であると認識できていた。このように考えると、(22) の *including* を動名詞と間違えて、主語を *items* と *including* のどちらかに決定できなかったのではないかと考えられる。(24) において「主語がわかりにくかった」のも同様に、*considering* を動名詞であると間違え、*considering* と *baseball* のどちらが主語であるかを決定できなかったと思われる。

⑧ 困難点の分析：「to不定詞」

(25)には to不定詞が3つ含まれており、コメントにto不定詞に関する言及があったので、3章に⑧として取り上げた。しかし、他にもさまざまな要素が含まれているので順次、学生のコメントに沿って(25)における困難点を検証していく。現在完了形の *have believed* は、現在までの状態の継続を表している。つまり、「ずっと信じてきて今も信じている」ということだが、学生は *believe* が動作でなく状態を表すことを思い出した可能性がある。

次に、*ensure* は *enlarge* と同様に、接頭辞の *en-* は形容詞や名詞に付いて「…にする」という意味の動詞を作っている。*ensure* を辞書で調べると、「(成功など)を確実にする」、*that*節を取り「…だと確かめる」などの訳語も載せられている。しかし、(25)の場合、目的語をとっているので「(顧客満足度を)確実にする」という表現が具体的で分かりやすい。

そして、従節の *be*動詞については「*is + to* は熟語として覚えているが、どのような時に使うのか疑問に思った」と述べられているので、学生は「*be + to*不定詞」によって「予定」、「運命」、「可能」、「命令」、「当然・義務」などを表せるということを知っていたようである。しかし、ここでの *to*不定詞は名詞的用法で補語として用いられている。「*be + to*不定詞」のように注意が必要な用法ではない。主語の *way* は、(6)の主語の *key* と同様に(6)や(25)のような構文に主語としてよく用いられることが知られている。

最後に(25)の *myself* は強意用法なので、コメントに述べられているように「～自身が…」と理解して問題ない。しかし、再帰代名詞の用法は他にもあり、*He was beside himself with anger.* (彼は怒りで狂いださんばかりだった) という例などのように「～自身」と訳されない場合もある。また、再帰代名詞が文中に現れる位置が常に同じではないことも学生にとって再帰代名詞が定着しなかった原因の1つであると思われる。

⑨ 困難点の分析：「関係代名詞」

(26)～(28)においては、それぞれ関係代名詞 *who*, *what*, *which*が問題として挙げられていた。近松(2004:39)によると「現在の統語論では、関係詞節が移動を伴う構文として、ほかの *wh-*構文などと平行的に扱われ… 関係詞節、疑問文、感嘆文などは、*wh-*句と本来の位置(基底位置)に残された空所(痕跡)が対(*pair*)を成しているという特質を共有している」。そのために学生が混乱している可能性もある。実際に(26)のコメントには、関係詞節や疑問文という用語は使用されていないが、「*who* が2つも出てきているからわかりにくい」と述べられている。*what* は疑問文や感嘆文でも使われるが、(27)の関係代名詞 *what* については先行詞を兼ねている点が *which* や *that* と異なっているので「わかりにくかった」のかもしれない。

波多野(2006:13-14)によると、非制限的關係代名詞節が文末の位置に現れると、その表す意味が付加的、補足的説明的記述ではなく、主節と同様な重要度で伝えられる情報となることが多い。そしてその場合、関係代名詞は「*and + 代名詞*」で書き換えた場合とほぼ同じであると述べられている。本稿では、(21)にそれに該当する文末の非制限的關係代名詞節があり、それは主節と同じほどの重要度で伝えられる情報となっている。

(28)において、*for which* で始まる節は文末にあり、「そして、そのために」のように「そして」、

つまりandでつながっている。安井(2007:266)は、「関係副詞の非制限的用法は、when と whereに限られるが、why や how を用いたいときには、for which reason, in which などをもって代用させる」と述べている。(28)のfor whichで始まる節は理由を表しているので、「why を用いたいとき」に代用されたものであると思われる。

5. おわりに

リーディングの理解における英文法の困難点についてPower-Up English (Pre-Intermediate) の Reading Section における英文を授業実施後の学生のコメントとともに検証した。その結果、どの文法項目にどのように重点を置けば有効であるかある程度示すことができた。

学生は基本的な文法項目を知識として持っていると思われるが、実際のリーディングで感嘆文、命令文、受動態の文でさえ、それが複合的に絡み合うと正しく文構造を解析できないことがある。等位接続詞においても解析ができていなかったのも、省略されている語句を示す必要があることが分かった。前置詞においては多義性が問題である場合が多かった。また、前置詞が形容詞句を導く場合よりも副詞句を導く場合に理解がより困難になるという結果が示され、特にwithで始まる副詞句は難解であったようである。準動詞では分詞の副詞的用法の理解不足が目立った。関係代名詞も文意把握を妨げる困難点として挙げられていた。

学生のコメントに挙げられていた文法項目を調べると、限定された用語しか記述されていないことが判明した。抽象的な概念なので用語が難しいと思われるが、様々な構文などを説明するのにやはり文法項目は有効である。関係代名詞を例にとっても、節や接続詞の概念がなければ、「関係代名詞は代名詞と接続詞の働きを持つ」と言われても理解できないであろう。限られた時間内でしか英語でコミュニケーションをする機会がない学生に英語の運用能力を育成するとすれば、やはり文法知識の定着が必須であると思われる。

授業におけるリーディングで文法を重点的に取り上げることによって学生をつまづいている文法項目をさらに明瞭にして、学生が理解し、納得できるものにする。そして、学生の文法力を正確に英文が読める段階にまで高めていくことを英語教育に携わる者として目指したい。

注

- 1) Power-Up English (Pre-Intermediate) の概要と授業の対象学生については神野(2016)を参照。

引用・参考文献

- 安藤貞夫(2011).『英語の文型一文型がわかれば、英語がわかる一』(開拓社 言語・文化選書5) 東京: 開拓社.
- 近松明彦(2004). 英語における自由関係詞節と疑問節の解釈上の相違について『大阪学院大学 国際学論集』15(1), 37-58.
- 江利川春男(2011). シンポジウム「日本の英語教育をどうするか」第1回英語教育総合学会資料. 大阪. 2011-07-31.
- Fabb, Nigel (1990). "The Difference Between English Restrictive and Non-Restrictive Relative Clauses." *Journal of*

Linguistics 26 (1), 57-78.

- Gilbaldi, Joseph (1998). 『MLA英語論文の手引き』第4版。(原田敬一訳編) 東京：北星堂書店。(原書名：
MLA Handbook for Writers of Research Papers. 4th ed. New York：The Modern Language Association of
America, 1995)
- 波多野満雄 (2006). 関係代名詞について『東洋大学文学部 白山英米文学』31, 1-15.
- JACETリスニング研究会 (2015). *Power-Up English (Pre-Intermediate)*. 東京：南雲堂.
- 門田修平、野呂忠司、氏木道人 (編著) (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』東京：大修館書店.
- 金谷憲 (編) (1995). 『英語リーディング論—読解力・読解指導を科学する』東京：桐原書店.
- 神野雅代 (2016). 大学の英語教育における音声指導：*Power-Up English (Pre-Intermediate)* を実例にして『教
育研究実践論集』創刊号, 261-65.
- 成田一 (2013). 『日本人に相応しい英語教育』東京：松柏社.
- Swan, Michael (1980). *Practical English Usage*. Oxford：Oxford UP.
- 安井稔 (2007). 『英文法総覧』改訂版. 東京：開拓社.

辞書

- 『研究社 新英和大辞典』第6版 (2002). 東京：研究社.
- 『ロングマン英和辞典』(2006). 東京：桐原書店.